「新體幼稚園唱歌」の歌ひ方

東京女子高等師範學校教授　小松耕輔

日本の旗　日の丸の旗

先般倉橋惣三先生の作詞によつて私が作曲した「日本の旗　日の丸の旗」について教授上必要と思はれるふしぶしを次に略記いたします。歌詞は次の通りであります。

日本の旗　　日の丸の旗
高く立てよ　　高く立てよ
朝日の色を　　赤く染めて
明るい空に　　ひら〳〵〳〵と
輝く光り　　日の丸の旗
日本の旗　　日の丸の旗
高く立てよ　　高く立てよ

以上の如くであります。

元來我が國に於ては、國旗掲揚の場合には「君が代」の國歌奏樂裡に竿頭に掲げるのでありますが、幼稚園等に於ては、もつとくだけた氣持で揚げたいと云ふ氣持は誰でも持つてゐることゝ思ひます。軍隊等に於ては莊嚴なる國歌奏樂の中に掲揚されるのは最もよろしいのであります。

此の歌詞を讀むと、その構成について誰でも氣づくことは、最初の二行、即ち「日本の旗、日の丸の歌。高く立てよ、高く立てよ。」の文句は最後にそのまゝ繰返されてをります。それ故この歌詞は長いやうに見えますが、實は五行の短い歌になつてをるのであります。

作曲の場合もこのことを考へて同じやうな節でくり返してをります。唯最後の節のくゝりをつけるために少しくかへてあります。即ち初めのところは

5 6 7 | 1 3 2 0 | 3 4 3 | 2 5 1 0 ‖
タカクタテヨ　タカクタテヨ

となつてをりますが、最後のくり返しの場合には

1̇ 1̇ 1 6 | 5 6 5 0 | 5 6 5 | 3 2 1 0 ‖

となつて完全に曲が終つてをります。先づこの點を注意して幼兒に歌はしてほしいと思ひます。この同一の詞が、異つた節で作曲されてゐることを子供に十分會得さしていた

だきたいと思ひます。

子供は同じ詞が出ると、どうしても前の節で歌ひたがります。それ故方便としては最初の二行と最後の二行とを比較して子供に教へてしまふのも一方法でありませう。

それから全體の曲について申しますが、初めのニッポンノハタのニッポンといふところですが、ニッといふところの「ッ」を呑んでしまつて歌ふのであります。ニーポンとならぬやうにしたいと思ひます。

その次のヒノマルノハタのところは、

3. 4 5 6 | 5 3 5 0
ヒノマルノハタ

であります がひよつとすると次のやうになりたがりますから御注意ください。

3 3 5 6 | 5 3 5 0

それから八分休止符は時長だけ完全に休ましてください。次に樂譜の三段目の初めアサヒノイロヲのところですが、これは、

2. 2 2 3 | 1 2 3 0 | 3 3 4 | 3 4 5 0
アサヒノイロヲ　アカクソメテ

このアサヒのところが、次のやうになりたがりますから御注意ください。

2 2 3 3 | 1 2 3 0
かうなると、とても平凡になつてリズムがこはれます。音程と附點音符とに御注意願ひます。

すぐ次の

3 3 4 | 3 4 5 0
アカクソメテ

は、なんでもないやうに見えますが、音程がくづれます。ミーミファ、ミファソと半音が二度つゞいて出てくるので音程が狂いやすいのであります。此處は少しづゝ強くなつてまるります。

その次の二行が此の曲の中心であります。

1. 1 1 6 | 5 6 5 1. 2 3 4 | 3 4 5 0
アカルイソラニヒラヒラヒラト

1. 1 1 6 | 5 6 5 1. 2 3 4 | 3 2 1 0

此處は元氣に強く歌つてほしいと思ひます。この二行は初めは上行的な樂句で次は同じやうな節をくり返しますが、終りのところが下行的の樂句になつてをります。この對照をはつきりと子供に會得さしてください。それから息つぎの處が次の節に直ぐつゞきますから、一寸息をつぐや

うにして、息つぎの處の間がのびぬやうに注意してください。此處でも矢張り附點八分音符を十分時長を保つやうにしてください。この邊で旗が旗竿の七分目位のところへ達するやうにありたいと思ひます。

此處がすむと、再び最初の節が出てまゐりますから、落付いた氣持になつてゆつくりと歌ひ出してほしいと思ひます。そして最後のタカクタテヨ、タカクタテヨのところ、うつかりすると子供は最初の節になりたがります。此處を十分御注意願ひたいと思ひます。このおしまひで、ピタリと旗が竿上にひるがへるやうにしたいと思ひます。

歌詞はあまり歌謠調子にならぬやうに、むしろ言葉のまで朗讀的に歌はれることを希望いたします。

○

暮の二三日を輕い風邪氣味で寢てゐながら、ふと思つたことでした。

いろ〳〵のところで、いろ〳〵の子どもが、いろ〳〵な年を迎へるであらうと。そのなかで、溫く、明るく、樂しい方の子どものことよりも、冷く、暗く、樂しくもあるまいと思はれる子ども達の方が、次から次へと、想像の目の前に見えて來るのでした。

病院の白い壁、白いベット。そこにほそ〳〵と、蒼白い顏に眠つてゐる子ども。その目には長いまつげが見え、その額には青い血管が浮いてゐる。いま、附添ひのお母さんは、一寸、どこへか行つたか……私は寢がへり打つた。

きたない長屋の一室。なんといふガランとした室か。さむ〳〵と障子の破れ紙が風に動いてゐる。黑い瀨戸物のこわれ火鉢には火がない。それどころか灰も底に沈んで固まつてゐる。そのそばに、寢てゐる母親。その傍に泣いてゐる子ども。父親はどこへ行つてゐるのか……私は寢がへりを打つた。

そこは、どこか私の未だ知らない土地である。あたりは騷しい人聲に何を言ひ爭つてゐるのか。人々は皆怖れと飢えとに身をふるわせてゐる。その横の方のごみの山の傍に二人程子どもがゐる。遊んでゐるといつていゝのか、唯しやがんでゐるといつていゝのか。兎に角く、動く元氣も、笑ふ元氣もない子ども達である。そこへ、通りかゝつた日本の兵隊が、急がしい足を一寸止めて、軍服のポケットから何か出して、その子等に與へた。その子等は默つて、それを貰つて、それでも、一寸頭を下げて何か言つてゐるらしい。が、それは支那の言葉で、私には分らない。……

私は、また寢がへりをうつた。

（S・K）